

2014年3月期 第3四半期 決算カンファレンスコール

(2014年1月29日実施)

取締役 執行役員常務 経理財務本部長 青木昭一 スピーチ

<P.1：2014年3月期第3四半期累計 決算概要>

当期第3四半期累計では、前年同期と比較して大幅な増収増益となりました。

売上高は前年同期に比べ15.6%増加の1兆714億円、営業利益は前年同期比75.1%増加の897億円、税引前四半期純利益は前年同期比60.2%増加の1,103億円となり、利益率は10.3%となりました。また、四半期純利益は前年同期比54.2%増加の694億円となりました。

また、設備投資額及び研究開発費は、それぞれ前年同期とほぼ同額となりましたが、減価償却費は、ベトナム工場の稼働や京セラサーキットソリューションズの子会社化により、前年同期に比べ20億円の増加となりました。

なお、当期第3四半期累計の平均為替レートは、米ドルは前年同期に比べ19円円安の99円、ユーロは30円円安の132円となりました。この円安の影響により、前年同期に比較し、売上高は約1,180億円、税引前利益は約240億円押し上げられました。

<P.2：2014年3月期第3四半期累計 事業セグメント別売上高>

事業セグメント別の売上高につきましては、当期第3四半期累計では、前年同期に比べ全てのセグメントで増収とすることができました。

<P.3：2014年3月期第3四半期累計 事業セグメント別事業利益>

事業利益については、当期第3四半期累計では、その他の事業を除く全てのセグメントで増益となりました。次に、第3四半期累計の要約について説明いたします。

< P. 4 : 2014年3月期第3四半期累計決算要約（前年同期比） >

まず売上高ですが、部品事業、機器事業ともに前年同期に比べ2桁の増収とすることができました。部品事業は、太陽電池やスマートフォン関連、自動車関連等の主要市場での需要の伸びを捉え、前年同期に比べ15.5%の増収となりました。

太陽電池市場は、国内の産業用の需要が引き続き増加したことにより、ソーラーエネルギー事業の売上高が大きく伸びました。国内向けの太陽電池の販売量は、前年同期比2倍を超える実績となりました。

またスマートフォン関連市場では、シェアアップによるコネクタの販売増や、端末需要の伸びに伴い、セラミックパッケージ等の売上が増加しました。

自動車関連市場では、自動車生産量の拡大に伴い、金属加工用の機械工具の売上が伸びたことに加え、カメラモジュールの需要が米国での車載カメラ搭載の法規制化への動きを背景に増加しました。

続いて機器事業ですが、積極的な新製品投入や市場開拓により販売台数を伸ばすことができ、前年同期に比べ20.8%の増収となりました。

「情報機器関連事業」は積極的な新製品投入により、複合機を中心に、特にロシアや中国などの新興国での販売が増加し、また円安の効果もあり、大幅な増収となりました。

「通信機器関連事業」では、スマートソニックレシーバーや防水機能の搭載、薄型化などで差別化を図った端末の販売が好調に推移しました。

また、国内外の既存客先での販売増に加えて、今期より北米の大手通信キャリアとの取引を開始したことも、売上増に貢献しました。

次に事業利益ですが、部品事業の増益を主因に前年同期比76%の大幅な増益となりました。

主要市場で部品の売上が順調に増加したことに加えて、各事業で原価低減を図ったことにより大幅な増益となりました。

また、前年同期にはA V Xの環境汚染浄化費用2 1 3億円を計上しておりましたが、今期は費用の発生がなかったことも利益増の要因です。

決算短信の7ページに記載しておりますが、A V Xの環境汚染浄化費用については、既に公表している米国政府機関と合意した和解内容が、昨年1 1月に米国連邦地方裁判所の承認を受け、本件は最終確定しました。この結果、本件に関して、A V Xで今後追加費用が発生することはなくなりましたことをお知らせいたします。

以上が当期第3 四半期累計の決算要約です。続いて、第3 四半期3 カ月間の業績についてご説明いたします。

< P. 5 : 2 0 1 4 年 3 月 期 第 3 四 半 期 (3 カ 月) 決 算 概 要 (前 年 同 期 比) >

こちらの表に、当期第3 四半期3 カ月間の業績を前年同期と比較して示しております。当期第3 四半期累計と同様に、売上、利益ともに2 桁の増加とすることができました。

< P. 6 : 2 0 1 4 年 3 月 期 第 3 四 半 期 (3 カ 月) 決 算 概 要 (直 前 四 半 期 比) >

こちらの表には、当期第3 四半期3 カ月間の業績を、直前の第2 四半期との比較で示しています。

売上高は第2 四半期に比べ増加しましたが、営業利益は減価償却費の増加等の固定費増を主因に減少しました。また、税引前利益は受取配当金の増加により、第2 四半期を大きく上回りました。

続いて第3 四半期3 カ月間の業績について、セグメント別にご説明いたします。

< P. 7 : 2014年3月期第3四半期 (3ヵ月)

セグメント別四半期業績 ファインセラミック部品関連事業>

資料上段に当期第3四半期と、第2四半期を比較した増減要因を記載しています。また、下段には前期第3四半期との比較を記載しています。

本日は資料上段に記載しています、第2四半期との比較について説明させていただきます。まず、「ファインセラミック部品関連事業」から説明いたします。

当期第3四半期の売上高は第2四半期に比べ増収となったものの、事業利益は減少しました。売上高は半導体製造装置用部品を中心とする産業機械用部品や、カメラモジュールなどの自動車用部品が増加したことにより、セグメント全体で増収となりました。

一方、利益については、PCやTV向けの部品の在庫調整の影響に加え、減価償却費の増加要因もあり、わずかに減少しました。

< P. 8 : 2014年3月期第3四半期 (3ヵ月)

セグメント別四半期業績 半導体部品関連事業>

「半導体部品関連事業」について説明いたします。

昨年10月より子会社となりました京セラサーキットソリューションズの貢献や、通信インフラ向けのセラミックパッケージの伸びにより、セグメント全体で増収となりました。

利益は、増収及び原価低減の効果により増益となりました。なお、利益率が第2四半期とほぼ同水準となりましたが、これは主にベトナム工場の立上げと、京セラサーキットソリューションズがグループに加わったことに伴う、関連費用が影響しています。

＜P. 9：2014年3月期第3四半期（3ヵ月）

セグメント別四半期業績 ファインセラミック応用品関連事業＞

「ファインセラミック応用品関連事業」は、国内での太陽電池の伸びに加え、機械工具の需要も順調に拡大したことから、売上高が増加しました。

利益についても、増収による効果とともに原価低減を図った結果、ソーラーエネルギー事業、機械工具事業ともに増益となり、利益率も向上させることができました。

＜P. 10：2014年3月期第3四半期（3ヵ月）

セグメント別四半期業績 電子デバイス関連事業＞

「電子デバイス関連事業」ですが、AVXの減収に加え、スマートフォン向けのコンデンサ、水晶部品、コネクタなどの売上が、一部客先での生産調整の影響により減少しました。また事業ポートフォリオの見直しとして、民生用タッチパネル事業を大幅に縮小していることもあり、売上高は第2四半期に比べ、減少しました。

事業利益は、スマートフォン向け部品の減収に加え、減価償却費や研究開発費の増加要因により、減少しました。

＜P. 11：2014年3月期第3四半期（3ヵ月）

セグメント別四半期業績 通信機器関連事業＞

「通信機器関連事業」について説明いたします。

売上高については、新モデルの投入効果により国内の販売が増加したものの、北米市場での従来型の携帯電話端末の販売が減少した結果、セグメント全体では減収となりました。

利益については、減収の影響はあったものの、国内の新モデル効果により横ばいとなり、収益性は若干改善しました。

<P.12：2014年3月期第3四半期（3ヵ月）

セグメント別四半期業績 情報機器関連事業>

「情報機器関連事業」については、A3複合機や低価格プリンターのラインナップ強化による売上増に加え、ロシア等の新興国を中心に販売が伸びたことにより、第2四半期に比べ増収となりました。

事業利益は、増収に加え、原価低減の効果により増益となり、収益性も向上しました。

<P.13：2014年3月期第3四半期（3ヵ月）

セグメント別四半期業績 その他の事業>

「その他の事業」では、京セラケミカルをはじめ、各子会社での売上増により、セグメント全体で増収増益となりました。

以上が当期第3四半期3ヵ月の説明であります。次に、通期業績予想について説明いたします。

<P.14：2014年3月期通期 業績予想>

通期の業績予想については、第3四半期の実績及び第4四半期の見通しを踏まえ、14ページに記載の通り修正しました。

売上高は前回予想から変更ありませんが、利益及び設備投資額、減価償却費を前回予想から修正しています。

また為替レートについては、当期第4四半期は米ドルを104円、ユーロを141円で予想しており、この結果、通期予想は米ドルを101円、ユーロを134円に変更しました。

< P. 15 : 2014年3月期通期 事業セグメント別売上高予想

(前回予想比) >

事業セグメント別の売上高予想については、全体では変更ありませんが、表に記載の通り修正しました。

< P. 16 : 2014年3月期通期 事業セグメント別事業利益予想

(前回予想比) >

また、事業利益についても表に示します通り、変更いたしました。次に今回の修正要因について説明します。

< P. 17 : 2014年3月期 通期業績予想の修正要因 >

まず、修正要因の1点目は、デジタルコンシューマ機器市場向け部品需要の減少です。第3四半期より、スマートフォン向けの部品需要が、一部客先での生産調整の影響を受けていることに加え、デジタルカメラ等の低迷が続いており、現状、第4四半期に大きく需要の好転を期待することは難しい状況にあります。この結果、セラミックパッケージや水晶部品、コネクタ等の売上が、10月予想を下回る見通しです。

修正要因の2点目は、「電子デバイス関連事業」での構造改革費用の計上です。既にご説明しておりますが、当社は、民生用タッチパネル事業を縮小する等、収益性改善に向けた構造改革を進めており、これらの関連費用として、第4四半期に約20億円を計上する予定です。

3点目は「通信機器関連事業」の販売減少による影響です。

海外向けの一部の新モデルの投入計画が変更となり、来期にずれ込むこととなったため、「通信機器関連事業」の売上及び利益が前回予想を下回る見通しです。以上が、業績予想の修正要因です。

デジタルコンシューマ機器市場は、一部客先での生産や在庫調整が想定以上に続いております。しかし、引き続き市場の拡大が見込まれ、部品需要は第4四半期をボトムに、来期第1四半期以降、回復してくるものと考えております。

「通信機器関連事業」においては、端末の差別化を追求することで、今期は米国の大手2社に新規に採用いただきました。また国内でも、NTTドコモの回線を利用できる当社製タフネススマートフォンを今期末より販売する予定であり、国内外で販路を拡大することができております。

当社は、より訴求力のある端末の開発を進め、既存顧客での採用拡大に努めるとともに、引き続き、新規顧客開拓を進め、販売拡大を図ってまいります。

当社は、来期以降の需要の回復期に着実に収益改善を図ることができるよう、各事業の経営基盤の強化に努めるとともに、引き続きグループの総合力を活かした積極的な受注活動の推進や新規市場開拓、並びに原価低減に取り組んでまいります。

なお本日、「自己株式の消却」を公表しています。

当社は、株式交換を通じたM&A等の資本戦略に備えて、現在1,575万株の自社株を保有していますが、今般、500万株を消却することといたしましたのでお知らせいたします。

今後とも当社に対しまして、皆様のご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

以 上